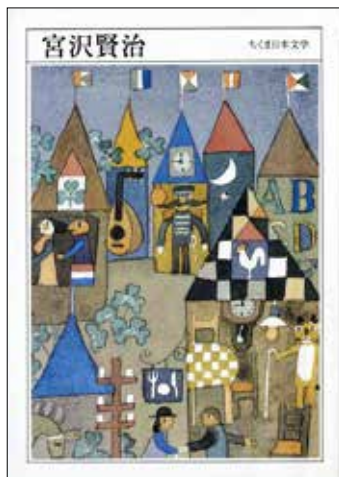


宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』

ベートーヴェンの交響曲に
創造の源泉を見出した詩人

ゴーシュは町の活動写真館でセロ(チェロ)を弾く係。しかし、彼の演奏は「感情というものがさっぱり出」ず、リズムも遅れ、音程も狂いがち。音楽会まであと10日というある日、楽長からさんざんに叱られます。夜中にひとり練習しているところへ三毛猫がやってきて、「トロイメライ」をリクエスト。翌晩はかつこうが、翌々晩は狸の子が訪れて…。ゴーシュが動物たちとの交流を通して音楽の神髄をつかんでいく『セロ弾きのゴーシュ』は、誰もが一度は読んだことのある童話でしょう。

作者の宮沢賢治(1896-1933)は、クラシック音楽の熱烈な愛好者でした。洋楽がようやく一般にも普及しはじめた1920年代に、最新のレコードを蒐集し、レコードコンサートを開き、歌曲を作り、チェロを独習していました。弟・清六氏の回想によれば、ベートーヴェンの「運命」に感激し、楽譜でなく言葉による交響曲として制作をはじめたのが詩「春と修羅」だったといえます。



『宮沢賢治(ちくま日本文学 解説・井上ひさし)』『セロ弾きのゴーシュ(など童話17編と詩10編 歌曲2編を収録 賢治の音楽性も含めた多彩な面をうかがい知る)』ことのできるコンパクトな1冊

ゴーシュたちが音楽会で演奏する楽曲は、作中では「第六交響曲」としか書かれていませんが、賢治が敬愛したベートーヴェンの交響曲第6番「田園」とする見方が有力です。「田園」の大きな幸福感に満ちた曲想は、賢治の描く理想郷=イーハトーブの世界観に重なるかもしれませんね。賢治の作品の底を流れる音楽に耳を傾けながら、あらためて頁を繰ってみてはいかがでしょうか。

紹介してくれたのは 世田谷文学館学芸部長 瀬川 ゆきさん

世田谷文学館では2016年1/16(土)～3/31(木)、「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる」を開催。初期作品から最新作までの原画やネームに加え、少年時代の漫画ノートやスケッチ、秘蔵イラストなど総数1000点以上を展示。詳細は問い合わせを。☎5374-9111



『20世紀少年』
©浦沢直樹/小学館



大竹伸朗 《漁船窓Ⅰ》

「既にそこにあるもの」との共同作業が創造の原点

世 田谷美術館の収蔵品のなかから、音楽と関係の深い作品を1点選んでご紹介する「音楽と美術 この一枚」。第1回は、作家・音楽家でもある大竹伸朗(1955年-)の《漁船窓Ⅰ》。

1977年5月、武蔵野美術大学絵画科在学中に大竹はイギリスに渡り、ロンドンでアルバイト生活をはじめ。最初に目を奪われたのはドラッグストア前のゴミ箱だった。ポートベローの蚤の市で色とりどりのマッチラベルとそれを貼ったノートブックを手に入れ、これを機に今に続く「スクラップブック」の制作が始まった。

《漁船窓Ⅰ》は、東京から愛媛県の宇和島に仕事場を移した直後の作品。造船所でもらった船の廃材を用いて、絵の具を塗り再構成した。彼の多くの作品は、ふと目にした、役に立たないような素材がコラージュされて絵画や彫刻へと生まれ変わる。

学生時代には「JUKE/19.」というバン



左のレコードはJUKEのセカンドアルバム。2004年2月、WIREの来日公演が行われた渋谷のクラブクアトロの客席に大竹伸朗さんの姿があった。ステージに立つ彼らはかつてロンドンで共演した仲間だった

JUKE/19. [97 Circles]
1981年(LP)



大竹伸朗 漁船窓Ⅰ 1986-88 Oil, oil stick, plaster, wood (reclaimed ship timber) on canvas 255x200x18cm
© Shinro Ohtake Courtesy of Take Ninagawa

ドを結成。街中で興味を惹いた音や工事現場の騒音、ラジオのノイズなどを録音して、8チャンネルのミキサーに楽器の音を重ね、レコード盤を自主制作している。

「僕は絵を描いたり立体をつくることと、音楽を創作することの境界を昔から意識したことがない」という。「既にそこにあるもの」(エッセイ集のタイトルでもある)との共同作業が創造の原点であり、ゴミや雑音に聞こえるような素材も、大竹の手にかかると見事な作品へと変貌するのだ。

紹介してくれたのは

世田谷美術館美術課長/学芸員 矢野 進さん
担当した主な展覧会は、「瀧口修造と武満徹展」、「花森安治と『暮しの手帖』展」、「植草甚一/マイ・フェイヴァリット・シングス」、「東宝スタジオ展 映画=創造の現場」など。

音楽と舞台 の一幕

ロベール・ルパージュ作・演出 《Needles and Opium 針とアヘン》 ～マイルス・デイヴィスとジャン・コクトーの幻影～

劇場に降り立ったマイルスの幻影

ジ ャズの巨星マイルス・デイヴィス。彼の音楽とその存在を抜きに語るこのできない舞台が昨年10月、世田谷パブリックシアターにて上演されました。演出は、“映像の魔術師”の異名を持つロベール・ルパージュ。シルク・ド・ソレイユやメトロポリタンオペラなどの演出を手掛ける当代随一のクリエイターです。当劇場との縁も深く、『月の向こう側』などの名作一人芝居が上演されました。そして副題の通り、本作のモチーフはマイルスとジャン・コクトー。芸術史に燦然と輝く彼らの“幻影”が現代に浮かび上がる、幻想的な作品です。

1949年、ニューヨークに渡りアメリカへの憧憬と幻滅の気持ちが入り乱れるコクトー。一方、マイルスはモダンジャズを旧大陸に広めるべく同年フランスに到着します。彼はフランス国民から熱烈な歓迎を受け、運命の女性ジュリエット・グレコと恋に落ちます。劇中、グレコと別れへロイン(=注射針)に溺れるマイルスの苦しみか、現



撮影・青木司

代を生きる主人公の失恋による喪失感とオーバーラップし、互いに共鳴していきます。1957年、再びパリに渡り、新鋭ルイ・マルの映画『死刑台のエレベーター』の劇中音楽を録音したマイルス。ラッシュフィルムを見ながらの即興演奏だったといいます。グレコへの思いが込められたような哀切ある旋律が次々と吹き込まれていき、劇中でもそのシーンとはとりわけ胸が締め付けられました。新しい音楽を更新し続けるエキセントリックな超人、という印象があったマイルスですが、暗闇に浮かぶキューブの中に現れたその姿からは、ひとりの人間としての悲しみや孤独感が滲み出ていました。

紹介してくれたのは 世田谷パブリックシアター 広報 宇都宮 萌さん

「劇場は広場」という言葉が入口に刻まれた当劇場では、同時代を生きる人々が集い、明日への糧となるものを持ち帰っていただけるような演劇・コンテンツ・プログラムを創造・上演しています。今後の作品に、作・演出の赤堀雅秋の元に光石研、麻生久美子、大森南朋、木下あかり、田中哲司という心躍る出演者が集う『同じ夢』(2月 シアター・トラム)、鬼元アラキー(荒木経惟)の世界に日韓同世代のダンサーが挑む『原色衝動』(2月 世田谷パブリックシアター)など。